

鳥城

第79号
令和2年5月発行
(2020年)

発行
岡山県俳人協会
事務局
〒700-0824
岡山市北区内山下
2-5-10 角南方
TEL (086) 223-7519
振替口座01380-0-102923
(年会費専用)

令和2年度定例総会開けず

（新型コロナウイルス拡大予防のため中止）
決算・予算・事業計画は幹事会で決定済み

岡山県俳人協会会長 曾根 薫風

令和2年度の総会は、3月15日（日）岡山県立図書館多目的ホールで開催する予定であったが、新型コロナウイルス感染拡大予防のために、春の吟も含めて中止せざるを得なかった。政府の自粛要請の要件に我々の会はすべて当てはまるので、まさに苦渋の選択であった。

令和2年3月2日（月）に国際交流会館の1階ロビーで緊急の事務局会議（会長・副会長・事務局長・会計・合同句集編集長・鳥城編集長・吟行担当）を行ったが異様な静けさであった。国際交流の催し物案内の電子掲示板はすべて空欄となり、我々だけがロビーでひっそりと協議した。

幸い2月4日（火）の幹事会で総会にかける原案がすべて承認されていたので、幹事会の原案通り本年度の行事を実施することにした。詳細は3月4日付けで全会員に送付した資料の通り。従来と異なる主な変更点は次の2点。
①大会の当日句は賞品のみで賞状は廃止する。

②「もも句会」への助成金を3万円に増額する。なお大会への青少年の投句を増やすために大会要項を早め作り、俳句部のある高校や大学に送付することなどが主に協議された。

また幹事会に先立ち昨年12月8日（日）28人の参加をえて、常任幹事会を実施。40回大会の総括と一部役員の交代を行った。

ともあれ合同句集15集も出来上がり、配布等も含めて各部門のキャップの方々には例年にならぬ苦勞をおかけした。特に事務局長には例年にならぬことで多大なご苦勞をおかけした。

昨年私が会長に就任した時「組織は人なり」と会員増加のご協力をお願いしたところ256名から、264名になった。退会された方もあるので、新しい方が10名以上増えたことになる。数は力。益々仲間が増えますように皆さまのお力添えをお願いし、そして秋にはウイリスも治まり、大会が無事実施できますように祈りたいと思います。

令和2年度事業計画
1 第41回俳句大会 10月18日（日）
講師 田中 春生氏

岡山国際交流センター

2 会報「鳥城」6月と12月発行
3 吟行句会 秋季 10月29日（木）
4 協賛事業

▽倉敷市文化祭俳句大会

5月23日（土）倉敷市芸文館アイシアター

▽もも句会活動支援

役員（新任のみ）

事務局次長 磨家 泉
幹事 井脇千代子
監事 高木 幸子

3月15日、岡山県立図書館にて、合同句集15集が配布された。



県立図書館中庭で合同句集を配布

句会紹介 香雨岡山

新しい時代に：

鷹羽狩行主宰の元、四十年の歴史を持つて終わった「狩」の後を受け、新結社「香雨」が誕生してこの六月で一年半になった。

主宰は狩行直弟子の片山由美子先生。音大ご卒業後、狩行先生に師事し、数々の受賞を重ね、「狩」副主宰を経て「香雨」を創刊された。したがって「狩」岡山支部のメンバーは殆どがそのまま「香雨」岡山に移行している。

片山先生は文法について非常に厳密なものを要求される。俳人の中には、文法では認められてはいないが俳句には許される言い方があるという向きもあるが、片山先生は一切妥協なさらさない。

季語についても「生活実感は歳時記の季節に優先しない」という立場をとる。これについても、時代によって揺れ動き変化してきた、又現在も変化しつつある季語を絶対的なものとして固持する考えに必ずしも賛成でない俳人がいることも確かであるが、片山先生は歳時記を大切にしている。

又、「香雨」には「採った句」は勿論であるが、「採らなかつた句」にしっかりとページが割かれ、なぜ採られなかつたかを解説する。「狩」の句会では狩行先生が必ず採らなかつた句、問題ある句を取り上げて懇切丁寧に解説して下さったものだが、「香雨」ではそれを誌上で説明する。文法だけでなく言葉の用法についても具体的に説明がある。

例えば「陽炎」は「かげろへる」と動詞では

使わないとか、「さ庭」の「さ」は神を招く神聖な場所の意味であって狭い庭ではないとか、「麗か」はそれだけで春の季語であるから「春うらら」とは言わないとか：

香雨岡山の句会は、特に指導者もなく、又香雨以外の結社や無所属の方たちも出席していて、それだけに色々な観点から多彩な情報、考え方が活発に飛び交い、逆にそれはとても楽しく意義あるものと考ええる。

狩行先生の時代から年に3回大阪で関西句会があり、岡山からも毎回何人かが参加していた。事前に投句したものを当日の出席者、先輩の同人が選句し、最後に狩行先生の選があるのだが、その選評を聞くために大阪まで足を運ぶといつても過言ではないほど魅力的なものだった。今年から片山先生がおいでになるということを楽しみにしていたがコロナ騒ぎで中止になり、次の7月の来阪の予定を待っている。

主宰が替わり、会員の顔ぶれも替わってきた。地方はなかなかそれに対応しきれないが、色々なチャンスを利用して岡山は岡山なりのやり方で、狩行先生の「狩」の精神を、それを受け継いだ「香雨」の方針を大切に精進していきたいものである。

(石見邦慧)



俳句雑話③

健康と俳句

安光 頼耳

私は幼少の頃かなりの虚弱児であった。母乳が出ず家で飼っていた山羊の乳で育てたため、山羊乳貧血に陥ったそうである。小学生の時私を診察した医師は「この子は二十才まで生きることが出来るかどうか」と洩らしたことを私は後年母から聞いた。胸郭は扁平で高度の漏斗胸があり、走れば何時もビリ。朝礼の時など長く起立しているとすぐ気分が悪くなり、時には眼の前が真っ暗になって意識を失った。その私が現在九十四才の独居老人、何とか自立し、聴力はほぼ正常、歯も二十五本。時々私の年令を聞いた人が健康の秘訣を教えて呉れと仰言る。その時私は迷わず「俳句です。」と答える。

歌人吉野秀雄は「写生とは正しく観ること、正しく感ずること、正しく表現することの三つだ。」と言っている。写生派の俳句に入門し、今もそれを墨守している私にとって、この言葉は忘れ難い。一方認知症予防の王道は思考しながら行動すること、たとえば尻とりをしながら歩くことなど。俳句の吟行は歩き乍らふと眼についたものをじつと見つめ、そこに季を感じ句心をかき起す。五七五という世界最短の詩型の中にそれを詰めこんで耳に障らないものに仕立て上げる。正に吉野秀雄の写生三原則である。行動と思考の同時進行という点で俳句は最高の認知症予防法と思う。しかし私も最近は何時ほけるかも知れないと感じている。若しも私がそうなたら、あいつの俳句はやはりいいかげんなものだったと笑って頂こう。

新しきは俳諧の花

俳句のルーツ、連句の話

大倉 祥男

平成10年宇宙飛行士の向井千秋さんは、ディスカバリー号から(宙返り何度もできる無重力)という前句を作り、その下句を地球の人々へ募集した。(地球でもする数蚊つばくら)と私は付けたが、今思えばこれは一種の短連歌。無重力や蚊などの俗語を用いているので俳諧連歌のひとつコマだったと言える。

「連句」の呼称は明治30年代と比較的新しく、それ迄は俳諧(俳諧連歌)と呼ばれていた。元々連歌の一部門(余興)的存在であった。その連歌の発祥はまことに古く、倭建命東征伝承中のつぎの唱和だとされている。

新治筑波を過ぎて幾夜か寝つる 倭建命
日々なべて夜には九夜日には十日を

御火焼翁

俳諧は連歌では詠まない通俗・滑稽を内容に取込むことよって、連歌とは別ジャンルの文芸として歩み始めた。但し連歌の形式(作法・式目)をそのまま踏襲したので俳諧連歌と呼ぶことになった。その「式目」は作品を円滑に仕上げるための進捗手引きである。現在では連句という呼称なので、以後連句と表記する。

座の文芸

連句は数人のメンバー(連衆)で、長句(五七五)と短句(七七)を交互に連ねてゆく。これを何句も続けてゆく訳だが、前句に付けるのは別の人というのが大きな特徴で、このような合作文芸は世界的にも他に例を見ない。ある意図で詠んでも、

別人が句を付けると思いがけない展開になる。また苦し紛れに付けた句が、次の付句によって息を吹き返すこともある。連句の妙味はその漂泊性と調和。顔を連ねたメンバーの「座の文芸」たる所以である。

歌仙は三十六歩なり

長・短句合わせて三十六句のものを「歌仙」という。春夏秋冬、二花三月、雑(無季)、恋、その他の事象を詠込み一巻の物語を成す。(歌仙は三十六歩なり、一歩も後に帰る心なし)とは芭蕉の言葉。停滞を嫌い前へと進める。これが一巻を貫く基本精神である。俳句の三要素、挨拶滑稽・即興は本来連句の骨髄。発句はその場への挨拶であり、挨拶だから季語を入れた。芭蕉の「謂ひ



たまには出掛て…後楽園・観騎亭

おほせて何かある」は、発句についての心得。全てを言い尽くさず、脇句を付けやすい余地の大切さを言ったものであった。

いっぺん覗いてみる

連句の作り方、進め方について書くつもりだったが、書いて説明するとこれくらい難しいものはない。やり方くらい知っておきたいと思うなら、句会見学から入るのが一番良い。入門書など読んでからというのが一番いけない。体験しながら読む、これなら役に立つ。

句会は数人単位の「座」を作る。捌と呼ぶ進行・調整役が居り、初心者には上手に手引きをしてくれるので、何の心配もいらない。

明治になって、西欧的価値観で処理しきれない連句は、古臭いものとして一度捨てられた。今日伝統文化の凝縮として、全国的に復活している。人間関係が希薄化している現代にあつて、連句の「座」はあたたかい。いっぺん座つてみることを是非お勧めしたい。

第41回岡山県俳人協会俳句大会

日時 令和2年10月18日(日)

会場 岡山国際交流センター

講師 田中春生先生

昭和28年生まれ

「朱雀」主宰

「香雨」同人

公益社団法人俳人協会幹事

句集『シユプール』『直幹』

「山花」

演題 「客観写生の射程」

応募句締切 6月30日(火)

第十五集合同句集鑑賞

作品は丸ごと作者自身

密田真理子

晩学は俳諧ぐるひほととぎす 津田 卿雲

ほととぎすの取り合わせはまことに言い得て妙、この作品は自分へのエールとも讃とも思えて、もはや自在の境地に遊んで居られます。

略歴を辿れば脳梗塞の後遺症もなく俳句・書道・ウオーキングが生活の三本柱に、書道は年八回出展。いつも自詠の句が作品となっていて二月には会長と並んで全紙の大作「真人」は墨量ゆたかに和紙の裏まで食い入るような筆勢の見事な作品の前に背筋を正されました。

俳句であれ書であれ作品は丸ごと作者自身であります。どうぞ存分にお楽しみくださいと祈るばかりです。

春風や時の流れに日日新た 若松美代子

「日日新た」は新約聖書第二コリント4章の（たとえ「外なる人」は衰えていくとも「内なる人」は日々新たに）を想起します。

昭和二年生まれの作者は岡山春嶺の月例会に玉野から参加されています。春嶺の創刊主宰岸風三樓の時代からの句歴で「俳句は作者の履歴書一日一日を十全に生きよ」が信条です。

（草餅は得意の一つ蓬摘む）料理上手は羽仁も

と子の友の会で鍛えられ講師のできる腕前でしょう。（思想しつつ生活しつつ祈りつつ）の精神を確り背骨に容れて日々を新たに凛と生きる作者の姿勢が彷彿します。

蟾蜍と実梅

景山 薫

石となる覚悟もあらむ蟾蜍の黙 山下 卓郎

以前住んでいた家に蟾蜍が現われた。蟾蜍が居を定めていたところに、私たちが住みはじめたのかも知れない。初夏のある朝新聞を取りに玄関を開けると、蟾蜍が待るごとく両手を突いて座していた。二、三時間買物に出て帰宅したとき、蟾蜍は朝と全く同じ位置に微動だにせず控えていた。その不動の存在感はまさに石そのものかと思えた。蟾蜍がただ石のようだったというのではない。自ずから覚悟をもって石になるうとしていると感じた。「石になる覚悟」には作者の気持も滲んでいるようだ。

実梅もぐ子ら同居の話など 池畑 智江

この梅の木は作者の庭のものである。真珠のような蕾から一輪ずつ咲き、春の到来を知らせてくれた。朝に夕にその花と香りを楽しみ、食卓に一枝飾ったこともあった。梅の実をもぐ時は子供たちも手伝い、にぎやかで充実した時間だった。今眼前の実梅に、無事に終わった子育てをふり返りつつ、子供の世話になるような齢になったことをしみじみ思うのだ。同居しないかと言ってくれる心情はうれしいけれど、自由気ままな生活も捨てがたい。子らとにぎやかに

実梅を採った日々が懐しく思い出される。

省略の中の背景

山本 一穂

新涼や手鍋にしほる山羊の乳 曾根 薫風

この方の詠む素朴な生活や風景の句はいつも素晴らしい。何よりも自然豊かな少年時代の実体験に基づくものだからであろう。掲句もその典型とも言える。私も戦後間もない物不足の時代に育ち、山羊の乳は命の糧ともいふべきご馳走であった。山羊の乳の手鍋を間歌的に叩く音が聞こえてくる。手鍋がいい。プラスチックなどではなくアルミの金属音が懐しい。使い古し、少しデコボコした形まで見えるようである。高原とは言え、この夏も暑かったに違いない。直線的に鍋を打つ乳の音が新涼に響き合う。

記念碑に遺る校名燕くる 広畑美千代

余分な修飾はほぼ捨象された秀句である。この作品は多くを読み手の想像に委ね、ご随意に味わって下さい。と呈示されている。先ずは記念碑の解釈。一つには作者の少女時代の校舎の跡とも。或いは地域を象徴する寺小屋等の施設跡かもしれない。この句の主題は「遺る」にあると見る。懐しさ、歳月の流れの早さ。作者に湧いた詩ごろをこの「遺る」に込められた。そして「燕くる」の季語がいい。校舎のあった頃から毎年忘れずに今年も又ゆかりの地にやってくるの思いも乗せられたのだろうか。

言葉の効果

馬屋原純子

銀漢の支流の一つ千曲川

山本 一穂

作者を軸にして天と地を流れる二つの川。掲出句は「銀漢」と「千曲川」の取り合わせによりスケールの大きな句となっています。

この句のポイントは「支流の一つ」の措辞でしょう。千曲川は山梨、埼玉、長野の三県に跨る甲武信ヶ岳を源流に発し、長野県を下り新潟県で信濃川と名を変える日本最長河川です。しかし地球規模を超え、千曲川を銀漢の支流と断定したところに潔い俳味を感じます。

銀漢を仰ぎ、壮大な宇宙と対峙している作者の姿も見えてくる作品です。

沈丁や歩いて増やす骨密度

大塚 功子

沈丁花は寒さの残る早春、濃い緑色の葉に囲まれて目立たず開き、香りによって花の咲いていることを告げる花です。

掲出句の「歩いて増やす骨密度」に意表を突かれます。この措辞がウォーキングを意味する斬新な表現と解ったとき、ただ歩くのではなく背筋を伸ばし、しっかりと土を蹴って歩く人の姿が映像となって立ち上がります。同時に、骨密度を気にせざるを得ないこの人物の、どこか物憂い心情が「沈丁」の季語に隠されているようにも思えます。

季語の斡旋の妙と、豊かな感性を感じます。

句から立ち現れる作者

白井 淳子

見舞状灼くるポストへ落しけり 近常 倫子

日常の何げない一コマを切り取った句ですが、中七「灼くるポスト」に深い感慨があります。「灼くる」は、特に近年の夏の耐え難い暑さを実感させる季語ですし、炎天下に立つ赤いポストはまさに暑苦しさの象徴と見えたのでしよう。

この暑さの中で闘病されている方はどれほど大変なことか。どうか負けないで早く元気になってほしいという作者の思いが伝わってきます。見舞状を「落しけり」の措辞も巧み。相手の方の快復を願いつつ、ポストの底へことりと落ちる音を確かめている作者の姿が浮かぶようです。

断崖へ砕ける怒濤沖繩忌

密田真理子

上五中七、どこの海かしらと読んでいくと、最後に置かれた沖繩忌。一瞬にして沖繩本島南端のまっ青な海が眼前に広がります。

「沖繩忌」は載っていない歳時記も多いですが、六月二十三日、沖繩戦が終結したとされる日です。摩文仁の丘に立つと、余りに美しい海に、一層悲惨な歴史の重みを感じずにはいられません。そして、この句にはもつと積極的な反戦の思いが見てとれます。それは「怒」の文字の効果。多くを言わず、怒濤に視点を絞ったことで作者の戦への悲憤がより強く響いてきます。

地球のどこかで

畑 毅

コロナウイルスが猛威を奮っています。対策として国境を封鎖し、街は分断されています。国民的コメディアンが雲の上の人になりました。変なおじさん、変なおじさん……。人が作った国境は見えますか？上から見る地球はまだ青いですか？人類史に残る時代を生きることになった私達は今を見つめ直して、一致団結して前を向きたいと思います。

信号復旧夏空へ赤が噴く

樋口千恵子

平成三十年豪雨の句です。悲しみは個人的であり、その人の悲しみはその人しか分かりませんが、気持ちに寄り添い、供養の中から得たものは、自分の行動変容に繋がります。それが供養と思います。いつか力になると信じます。青空へ向かって「赤が噴く」。まさに鎮魂から復興への絶唱です。

永き日の会ひたき人にまど・みちお

涼野 海音

静かに心の中で呟きましょう。「ぞうさんぞうさん おはながいのね そうよ かあさんも ながいのよ」穏やかな日差しの中で、健やかな日が戻って来ることを確信して。



会員の活躍

柴田 奈美

第35回聖良寛文学賞受賞

「正岡子規を中心に近・現代の俳人、俳句の研究も行い全国レベルの成果を上げている。」

涼野 海音

「俳句界」3月 北斗賞受賞作家競詠

「揚雲雀」

拍手湧くかに裏山のさへづりは

白雲は父のしづけさ潮まねき

鉄橋の向うは知らず揚雲雀

藤田 桜

『藤田桜句集Ⅲ』上梓

*次号(烏城第80号)で紹介予定

横田 多禾

第14回角川全国俳句大賞 自由題部門

鍵和田柚子選 秀逸

店頭に吊るジーンズや野分晴

畑 毅

第27回2019年度 西東三鬼賞 秀逸

みどりの日とや葡萄前進する赤子

新会員紹介

山本 哲史

霜降や昼の魚に小骨あり

日笠 永子

喜寿なりのたたかひありて夏帽子

(「烏城」第78号以降)

谷本 俊夫(椽)

尖閣は潮洗ふのみ星月夜

工藤千枝子(遙照)

奉書巻公魚酢漬け透けて見ゆ

鍋谷 恵子(遙照)

初霜や重きワイパー往復す

門脇登志子(遙照)

煩惱や迷路のやうな胡桃割る

高橋あい子(遙照)

ちぎり絵の指に残れる余寒かな

徳永 保美(遙照)

初舞のかんざし揺れる「春の海」

今後の主な行事予定

第四十一回岡山県俳人協会俳句大会

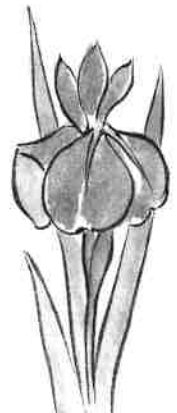
10月18日(日)(詳細は3ページに)

秋季吟行句会

10月29日(木)



合同句集配布
マスクで参加



カット 佐藤史男

写真 左居正恵

編集後記

暗・陰・悲・憂・辛・苦・鬱・哀……から明・光・楽・喜・輝・照・晴・望……へ。この「烏城」が皆様のお手元に届く頃にはこうなっていることを期待して。

(石見邦慧)

昨年より「烏城」の編集に携わり、いろいろ勉強させていただいております。会報を通し皆様方とご縁ができれば嬉しく存じます。身近な原稿をお待ちしております。

(岡本三恵子)

コロナウイルスで暗くなりがちな気持ちを庭の巣箱の四十雀に癒やされた。子育てを見守っていたが、みどりの日の夕方、十羽が無事に巣立ちほっとしている。

(原田慶子)

総会、春の吟行句中止のため、今回の烏城は6ページでお届けします。「俳句雑話」お二人目は安光頼耳氏です。九十四歳、経験豊かな安光氏の文章をじっくりと味わってください。カットは佐藤史男氏にお願いしました。どうぞお楽しみください。新型コロナウイルス感染症の一日も早い終息を願って。

(広畑美千代)